

第6回国際シオミドロ会議 (6th International meeting on the model brown alga *Ectocarpus*) を振り返って

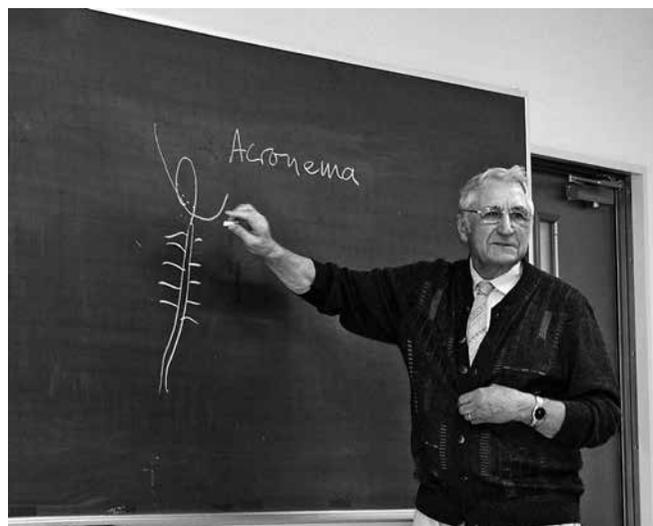
田中厚子

桜が咲き始めた3月の神戸で、第6回国際シオミドロ会議が開催されました。本会議は2年ごとに開催され、今回が初めてのアジア開催となりました。参加者は総勢29名（そのうち海外からの参加者は13名）で、ヨーロッパ開催時と比べると小規模となったようですが、結果的に参加者はより濃密な時間を過ごせたのではないかと思います。

3月28日から3日間の予定で開催された本会議は、シオミドロ研究の第一人者である Dieter G. Müller 博士の招待講演「シオミドロとの50年」で幕を開けました。褐藻を研究する者にとって Müller 博士が残した絶大な功績は自明のことですが、この講演ではご自身の50年に渡る研究歴についても触れられ、通常の学会発表等では知り得ないエピソードなども知ることでできました。驚いたのは1959年に博士課程に進学された Müller 博士が、その頃には既にシオミドロの生活史に興味を持たれ、性決定についての明確な疑問を呈されていたことです。この疑問を基にして築かれた膨大な研究の成果が礎となって、現在のポストゲノム時代のシオミドロ研究につながっていく様は非常に興味深いものでした。

そして翌日の29日には、Müller 博士のシオミドロ研究を礎にした性決定についての最新研究成果が Susana M. Coelho 博士（ロスコフ生物研究所、フランス）より報告されました。半数体の性決定遺伝子が倍数体のそれよりも非常に多く発現されていることや、成熟の有無によって発現する遺伝子の数や種類、発現量自体も変化することなどが報告され、動物や植物と異なる性決定システムが提唱されました。

シオミドロやアミジグサなど褐藻を用いた研究発表が盛んに行われる中で、最終日である30日には池尾一徳博士（国立遺伝学研究所）よりスサビノリのゲノム解析についての講演がありました。予想される遺伝子数は10,327であり、35%が機能不明であるとの報告があり、珪藻ゲノムに比べると非常に多く



講義後の質疑応答に答える Dieter G. Müller 博士

の遺伝子機能が推定可能であることに驚きを覚えました。

最後に、今回の会議では今後の方針についても意見交換がなされました。大型藻類の全ゲノムシークエンスが世界中で活発に行われている現状を踏まえ、シオミドロに固執することなく、藻類のポストゲノム時代を反映した形の国際会議としていくべきだとの意見が出されました。私自身は今回が初めての参加でしたが、ゲノムというキーワードの元に集まった多様な研究発表が聞けるこのような会議はとても刺激的で、今後も継続されることを願っています。

最後になりましたが、大会運営にあたり中心的役割を担われた神戸大学川井浩史先生をはじめ、ご尽力された神戸大学関係者皆様に深く感謝致します。

(北海道大学)



参加者集合写真